「痛み」の共感とボランティア
−「熊本および大分における地震」を覚えて−

舟　木　　譲

本年４月より「関西学院大学ボランティア活動支援センター」が発足し、またその下に日常の具体的な業務を担う部署として「関西学院大学ヒューマン・サービス支援室」が同時に設置され、そこでボランティアの情報収集や教育を担う「ボランティアコーディネータ」が働いておられます。1995年１月17日に起こった「阪神・淡路大震災」を契機として発足した教職員学生の有志からなる「ヒューマンサービスセンター」の働きと理念を継承しながら、さらに豊かな働きをなすための一歩が始まったと言えます。

そのように新しい歩みを大学が開始した直後であった４月14日夜ならびに16日未明に熊本および大分を中心とした激しい地震が発生し、その後の余震、土砂崩れ等による震災関連死を含めた犠牲者が60名をはるかに超え（４月26日現在）、行方不明者を含め今後も被害が拡大する可能性を含んで今日に至っています。

こうした事態に対して私たちが何をなすべきかが、これまでにも問われ、拙速にならず冷静で迅速な対応が叫ばれてきました。今現在もボランティアの受け入れが拡大し、今後さらに具体的な「支援」が必要となりますが、私たちの学校が拠って建つ理念である「キリスト教（主義）」は、このような事柄に対してどのような力を持っているのでしょうか。

この問いに簡単に答えを出すことは難しいですが、ヒントはキリスト教信仰の中心であるイエスの人間や社会に対する視点にあると言えます。イエスは同時代のユダヤの国内において常に「忘れられている人」「存在を否定されている人」「抑圧されている人」「差別されている人」等々何らかの大きな「痛み」を負い、さらにその「痛み」を孤独の中でさらに深くしている人々へまなざしを注ぎ、「寄り添うこと」を常に徹底されたと考えられます。

そして、私たちの学校のスクール・モットーである「Mastery for Service」は、まさにその時その時に最も「痛んでいる」人々の立場に立って現実を直視し、自らに与えられた力を十二分に発揮することを私たちに迫る言葉であり、またそのための備えを日々行うことへの誘いの言葉であると言えます。

今九州で、またそれ以外の地域において「痛んでいる」人への共感をもって、今なすべき事、なし得る事を判断し、それを実行に移す行動力を共に発揮して参りましょう。

（宗教総主事）